

# イタリア共和国とローマ日本人学校

帯広市立大空中学校

教諭 金元弘子

## 1 イタリア共和国の概要

### (1) 国土と気候について

面積 約 30 万平方キロメートルで日本の面積の約 8 割。南北に細長い半島部と、シチリア、サルデーニャの 2 つの島から成り立っている。北にアルプス山脈、スイス、フランス、オーストリア、スロベニアとは地続きである。

気候は地中海性気候、春から夏にかけて強烈な太陽の日差しが照りつけ高温で乾燥した天気が続く。夏は日差しが強く非常に暑い、「湿度が少ないので、日本の夏より過ごしやすい。」と関東地方や中国地方からきた派遣教員は喜んでいて、北海道から派遣の私だけが 5 月の運動会の練習のあたりから暑い暑いとぼやいていた。イタリアの国内が 6 月後半から 7 月にかけてバカンスに入り社会の機能が休止するのも理解できる。

### (2) 人口と産業

人口は約 5 8 0 0 万人である。農業国で、北部では小麦が多く生産されている。どの州でもブドウが生産されその土地のワインが作られており、世界有数のワイン大国である。また、南部ではオリーブオイルの原料であるオリーブや、オレンジ、レモンなどのかんきつ類の生産がさかんである。酪農も主要な産業で、何種類ものチーズが生産されている。イタリアといえば、農業だけではなく自動車のフィアットを代表とする自動車産業、各種服飾ブランドのファッション産業、そして多くの文化遺産を抱えるため観光産業が盛んである。現在でも工業が盛んな北イタリア、農業が主な産業となっている南イタリアとの経済格差が問題になっている。

### (3) 宗教と歴史

イタリアの歴史は非常に古いが統一国家としては若く 1 8 6 1 年イタリア王国が成立、イタリアが国家として統一された。また第 2 次世界大戦終結後 1 9 4 6 年 6 月以来共和国となっている。

人口の約 9 7 % がカトリック教の信者といわれている。キリスト教の総本山のヴァチカン市国が、ローマ市内にありローマ法王が住んでいる。どこの街にもたくさんの教会があり、大聖堂（ドオウモ）を中心に町が栄えている。日常生活においてカトリックの影響が大きく、年間行事も宗教に関するものが非常に多い。

### (4) 地方色豊かな国民性

2 0 の州から成り立っているが、その大半はイタリアが統一国家となる前から地方名として存在していた。1861 年のイタリア統一にいたるまで各地に数多くの都市国家が発達していたため、それぞれが他の都市とは違う独自の歴史と文化を持っている。都市の数だけ独自の文化があり「イタリアにはイタリア人がいない。」といわれる。



## (5) 首都ローマ

伝説では、紀元前 753 年にローマが建国されたといわれる。ローマの街中で、二人の赤ん坊に乳をやるオオカミの彫刻をよく見かけるが、これが有名なロムルスとレムスの双子の兄弟で、ローマを建国したと言われる伝説である。ローマは 2000 年以上の歴史が詰まった都市。国の政治と芸術と文化の中心。街の中心をテベレ川がゆっくり流れ、直径 5 キロの城壁の中にすっぽりとおさまっている。人口は約 270 万人。古い建物をむやみに壊してはならないという条例のため、遺跡や道路がほとんど昔のまま残っている。「コロッセオ」「トレビの泉」「フォロ・ロマーノ」「カラカラ浴場」など名前を挙げていけばきりがない。それら史跡に付随する美術館・博物館、すぐれた美術品を有する教会などを巡るため、世界中から観光客が集まる街である。



## 2 ローマ日本人学校について

### (1) 学校の名称・所在地

○学校名 : ローマ日本人学校 SCUOLA GIAPPONESE DI ROMA

○所在地 : Via Della Casetta Mattei 104 00148,ROMA,ITALIA

○運営主体 : ローマ日本人学校理事会により委嘱されたローマ日本人学校運営委員会

○目的 : 主としてローマ市およびその周辺に在住する日本人子女を対象とし、日本の文部科学省の定める小・中学校学習指導要領等に基づいて教育を施すことを目的とする。

### (2) ローマ日本人学校の概要

ローマ市およびその近郊に在住する日本人子女を対象とし、初等・中等教育を行うことを目的としている。

1975年に、ローマ日本語補習校として発足し日本文化会館の一部をかりて 58 人の子どもたちが通っていたのが始まりである。1990年に日本国政府より、正式に日本人学校として認可された。1996年にはイタリア政府から正式に学校として認められた。2003年には、現在校舎がある

Casetta Mattei 地区に校舎を移し、約 50 名の子どもたちが学



んでいる。日本人幼稚園、土曜日だけの補習校の子どもたちも同じ校舎で学んでいる。私の派遣期間中の最終年度は文部科学省からの派遣教員 10 名、現地採用の日本人講師 2 名、英会話講師 1 名。児童生徒数は 53 名であった。53 名の生徒に 10 名以上の教員という非常に贅沢に感じるが、小 1 から中三まで 9 学年に担任 8 名（中学部 1・2 年は合同ホームルーム）校長、教頭も授業を持たなくては行けない。各教員のもっている授業数や分掌の仕事は非常に多い。

子ども達の滞在年数は平均して 2 年～3 年。両親のうちどちらかがイタリア人の子どもも、日本の教育を受けさせたいという父母の希望により、数人在籍していたが、ほとんどは保護者の勤務の関係で、イタリアのローマに住んでいる子どもたちである。数年ローマですごしたあと国内の学校に戻る子が大半であった。低学年の子どもたちは、日本の学校生活の経験を持たない子がほとんどである。いずれは日本の学

校に戻ることを考えると、スムーズに日本の学校に適應するために、日本と同じシステムの日本人学校の役割は非常に多いと感じる。反面、高学年、中学部の子ども達は日本の学校を経験してきており、学力の保持という保護者からの要求は非常に高いものがある。

### (3) ローマ日本人学校児童生徒の学校生活

#### 登校・下校

多くの子どもたちは、カセッタマッテイ地区から、離れた地区に住んでいるためスクールバスで登校



する。朝の職員打ち合わせのあと、副日直がスクールバスの到着を確認し、無事に子ども達が学校に入るのを見とどける。学校周辺に住んでいる子どもは、必ず校内まで保護者が送ってくる。これは、イタリアの法律により小学生の子どもを一人にすることはできないからである。中学部の生徒もほとんどがスクールバスを利用して登校していた。スクールバスは、学校が運営しているのではなく、スクールバス利用者の保護者によりバス委員会というものが組織され、ローマ市内のバス会社に委託している。

#### 学校生活

子どもたちは8時30分に登校し、16時のスクールバスの出発の時間まで学校の中で過ごす。基本は日本の学校生活と同じだが、小中学生が中休みにいっしょに遊んだりするなど日本の学校ではなかなか見られない姿を見ることができる。中学部のみは週に2回7時間目があり、国語・数学・英語の授業が行われている。その間、小学部の生徒は校庭や体育館で思いっきり遊ぶ。小学部3年以上の子どもたちは「課外活動（野球・サッカー・バドミントン・テニス・音楽部）」があり、放課後、スポーツや音楽を楽しむ。このように学校は子どもたちにとって、思い切り友達と遊べる数少ない場所である。日本の学校と違うところは、校舎に放送設備が無いため、チャイムのならない学校であったこと、1時間目終了後にメレンダ（おやつ）の時間があつたことが挙げられる。イタリアの学校では10時ころにメレンダといって軽食を取る習慣がある。それにならつてというわけではないが、朝早くスクールバスに乗る子どもが多いため、1時間目終了後にメレンダを希望する家庭もあつた。主に低学年の子どもがおやつタイムを希望し、日本人学校の学校生活に慣れる中学年になるとメレンダを希望する子どもはほとんどいない。

#### 授業

日本の学習指導要領をもとに、教育課程が編成されている。子どもの人数や教員数の関係により音楽・図工・体育・家庭科・イタリア語は低学年、中学年、高学年、そして中学部の4ブロックで授業が行われている。その他の教科については、たとえ子どもがクラス一人であっても単式で授業が行われていた。中学部での授業時数は国・数・社・理・英は学習指導要領に定める授業数よりはるかに多くなつていた。それ以外に週2回の7時間目の授業で、国・数・英に3教科の授業が設定されている。小学部1年生からイギリス人のネイティブスピーカーによる英会話の授業が行われているのも特徴である。しばらくイタリア語の時間は設定されていなかったが、私の派遣期間中に復活した。また、在外教育施設の特徴を生かしたイタリア・ローマの地でなければできない学習も「総合的な学習の時間（ローマの時間）等」を通して積極的に行われている。



#### (4) 現地理解教育「総合的な学習の時間 ローマの時間」での実践

総合的な学習の時間を「ローマの時間」と名付け、現地理解教育が行われている。各学年ブロック内で子どもの発達段階や実態に合わせて指導計画をたて、それらが学習材として蓄積されている。私が携わった学年ブロックの「ローマの時間」での取り組みについて簡単に紹介したい。

#### 2006年度（派遣2年目） 小学部3年生を担当

小学部3年生・4年生の中学年ブロックでのローマの時間の取り組み

「とびだせ！まちたんけん」

これまでに、社会科や生活科で学校周辺の地図をつくり、地域散策をしてきている。社会の学習もかねて学校周辺の地域を調べる学習を設定した。店で売られている品物に着目することで、それらの品物がどこからやってきて、どのようにつくられているのということを考えさせ自分たちと地域とのつながり実感させたかった。

#### ① メルカート（市場）探検

初めに学校周辺の様子について、子どもたちに自由に想起させた。スクールバスで離れた地域から通ってくる子が多かったため学校の周りについて詳しく知らない子が多かった。学校から徒歩5分のところに、地域の人々が多く利用している小さなメルカート（市場）があるため、地域探索はメルカート探検で導入することにした。メルカートにいき一人2ユーロで買い物をする活動とメルカートで働く人々にインタビューする活動を行った。事前に質問内容を考えさせたが、それぞれの店で売られている品物の流通経路や保存の方法、一日の売り上げや来客数などの質問が多かった。質問はイタリア語が堪能な現地採用講師や、イタリア語が話せる子どもが通訳した。買い物はイタリア語の時間に覚えた簡単な言い回しを使い各自が行った。探検のまとめとして質問して分かったことを壁新聞にまとめた。



#### ② 牛乳工場探検

地域散策、メルカート探検を進める中で、学校周辺にはバール（コーヒーショップ）、お菓子屋、レストランが多くあることに気がつく。子どもたちはバールのジェラート（アイスクリーム）、お菓子屋のケーキ、レストランのピッツアやパスタに関心が高いことがわかってきた。そこで、ジェラートやケーキなどに欠かせない牛乳に着目し、次の学習を進めていくことにした。ローマのスーパーなどでよくみられる牛乳のうち、1つの工場が学校から路線バスでいける地域にあることから、牛乳工場に見学に行くことにした。牛乳工場の広報担当の方から、牛乳の集荷の方法や流通方法、牛乳の栄養素等について詳しい説明をうけた。広報活動の一つとして「牛乳工場探検学習」のような学習が工場内で企画され、専門の係の人が手際よく案内してくれた。子どもたちは牛乳の流通経路や牛乳の栄養価を詳しく知ることができ、牛乳がこれまで以上に身近な存在になったようである。

### ③ 農場探検1（農場見学・乳搾りやモッツァレラチーズ作り体験）

牛乳工場探検のときの児童が出した質問の中に「原料のミルクはどこから運ばれてくるの」というものがあつた。アグリツーリズム（農業を体験する宿泊施設）のような体験型の農場がローマ近郊にあり、子ども向けの体験学習を企画しているという情報を、前回の牛乳工場の広報担当者から得た。農場見学以外に、チーズ作りやジャムづくりパスタづくりなどのプログラムがあつたが、今回は牛乳に関連させてモッツァレラチーズづくりを選択した。子どもたちは、300頭を超える牛はもちろんのこと、農場で飼っているイノシシやダチョウ、馬などに興味を示し見学していた。乳絞りとモッツァレラチーズづくりの体験はほとんどの子どもが初めてで興味深く取り組む様子が見られた。

### ④ 農場探検2（オリーブ収穫・オリーブオイル工場見学）

農場探検1で農場に行った際に、動物の他にも多くの植物があることが分かつた。また、農場ではそれらを題材としたプログラムがいくつか用意されており、その中でも、イタリアの特産物であるオリーブに着目し活動を進めていくことにした。当日はオリーブオイルができるまでの過程を説明してもらつたあと、オリーブの実の収穫の体験をした。オリーブオイルの製造過程を見るためオリーブオイル工場の見学。隣に併設されているワイン工場の見学も思いがけずにできた。

### ⑤ ピッツェリア探検

モッツァレラチーズ、オリーブオイルから関連づけて、学校の近くのレストランでピザ作りの体験を行う。生地づくりから、トッピング、焼きあげに至るまで直接体験することができた。今まで自分たちが学習してきた材料が、イタリアの食生活に大きくかかわっていることに気づき今までの学習の流れを確認できた。

## 2007年度（派遣3年目） 中学部3年担任

内容「イタリアに生きる人々に学ぶ」 中学部

イタリアで生活している人々に興味をもち、その生き方に触れる中で自分の進路について考える。現地地理解教育と進路学習の両面を目的として設定した学習である。国際社会で活躍する日本人、日本語を学習するイタリア人にコンタクトをとり、体験学習および職場見学、インタビューを行った。学校の中だけではなく、外に出かけていく中でイタリアならではの学習を行い、広い視野にたつて自分の進路について考える一つの機会とさせたかつた。

### ① イタリアの伝統的職人にインタビュー、

この学習のオリエンテーションで、「イタリア」「職業」「生きる」をキーワードにウエッピングマップをつくり、生徒の興味関心をふくらませた。生徒の「イタリアに働く人々」に対するイメージは、「歴史」「音楽」「食」「サッカー」「遺跡」「美術」「職人」などであつたが、その中にあつた「職人」に着目し題材を設定した。イタリアの昔からの仕事を継承している「職人」に的を絞ってイタリアの文化や日本の文化の違いや、その地域になぜ「職人」が多いのかを追求する学習を展開した。ここでは「額縁職人」「紙細工職人」「靴職人」「木工細工職人」にインタビューする



ことを通して、仕事に対する個々の思いやその仕事振りを見ることができた。この題材を設定する上で新しく派遣された「国際交流ディレクター」と共に、ローマ市内のオルソ通り（職人工房が多い通りで有名）に何度も足を運び、学習材を発掘していった。国際交流ディレクターの導入により指導者だけでは見つけられなかった地域素材の発掘がスムーズにできた。それを指導者が学習の題材に練り上げていくことができ、連携をとりながら教材開発を進めることができた。

## ② イタリアで生活する日本人にインタビュー

海外で働く日本人。世界各国には「海外だからできること」を求めて在住している日本人が多くいる。イタリアも、音楽関係、美術関係、料理、修復などイタリアを修業の場とし、また働く場とし生活している日本人がたくさんいるといわれる。この単元では「企業ではなく、個人で事業を興し、イタリア社会の中で働く日本人」に焦点をあてて職場見学、インタビューをお願いした。イタリアに夢を求めて、ローマの中心部に日本女性の方がレストランを開いており、1日職場体験、海外で暮らす上の変りや、人生観等を伺った。

## ③ 職場体験学習

学校周辺にある「文房具屋」「レストラン」「ケーキ屋」「スポーツセンター」「庭師」「パール」にて、1人で3日（1日2時間）職場体験に行く。校舎移転後4年間で、前任の派遣教員や現地採用の教員、国際交流ディレクターが学校周辺の店や施設にコンタクトをとり、趣旨を理解してもらいながらつながりを築いてきた。イタリアの社会は、こうして時間をかけたつながりを大切にするとされている。子どもたちは、職場体験の内容よりも、たった一人でイタリア人の職場の中に入ることに心細さを感じていた。イタリア語が分からなくても、なんとかコミュニケーションをとりイタリア人と接していく体験は非常に意義があると感じた。3日目はだれもが満足してもどってくる姿が印象的であった。



## ④ 日本企業訪問

日本人学校の保護者が働いている、日本企業ブリヂストンのテストコースの見学および、日本人の方にインタビュー。テストドライバーが運転する車に乗り、テストコース内のドライブを体験。ローマ郊外に東京ドームの30倍の広さを持つ、テストコースがある。ヨーロッパ各地のアスファルトや、日本のアスファルト、37度の傾斜の道路などがあり技術開発がおこなわれている。3人の日本人の方に、技術開発の仕事におけるやりがいやイタリアの方と一緒に働く感想を聞くことが出来た。

## ⑤ ローマ大学訪問

ローマ「ラ・サピエンツァ大学」(Universita degli Studi di Roma "La Sapienza")日本語学科で日本語を学ぶ学生3人に大学構内を案内してもらおう。その後、日本語で自己紹介やお互いに質問をしあい大学生活や日本語について会話をしていた。その会話のなかでは「日本のアニメの事」「日本とイタリアの生活の違い」「イタリアの大学のシステム」等が話されたようである。こども達からは「イタリア人の目からみた日本の様子や日本の文化の話聞くことによって日本の良さを再発見できた」という感想を



聞くことができた。イタリアの日本語学習者の数に対して、それを生かした仕事が少ないという実態や、イタリアの大学を卒業するには何年もかかる人が多い、大学を卒業しても仕事がないなどイタリアの社会情勢なども生徒にとっては興味深かったようである。

## ⑥ 「国際連合食料農業機関（FAO）訪問」

ローマ市内には国際連合食料農業機関（FAO）世界食糧計画（WFP）国際農業開発基金（IFAD）の3つの国連組織の本部がある。国際連合食料農業機関（FAO）には日本人学校の保護者も勤務しており、見学やインタビューの便宜を図ってもらうことができた。多国籍の人々が一つの建物の中で働く国連機関内部の見学、国連機関について、世界の食糧情勢などを聞くことができた。この学習はインタビューだけではなく生徒が事前にFAOについて調べたことをFAOの日本人職員の前で発表する形式をとった。また日本人の若手国連職員の方からは、進路選択の動機などを聞くことができた。「イタリアに生きる人々に学ぶ」の進路学習は「イタリアの職人」「イタリアで働く日本人」などいろいろな観点から職場見学や体験学習を行ってきたが、最後はイタリアだけ、日本だけではなく広く世界に目を向けた学習で締めくくることができた。

## （5）現地理解教育「イタリアの学校との交流」

### ①ラッサリアーニ校との交流（ローマ市内の私立小・中学校）

4年前から、定期的にローマ日本人学校と交流学習を行ってきた私立の学校である。小学部では、カルネバーレ（謝肉祭）という2月の行事と一緒に参加させてもらうという交流学習を続けている。カルネバーレとは「肉よ、さようなら」という意味で40日後のパスクワ（復活祭）まで、肉を食べない期間に入る前のお祭りである。イタリアじゅうの子どもたちが、さまざまな仮装をしてコリアンダーと呼ばれる紙吹雪をかけあいお菓子を食べる。例年のことであるが、子どもたちが積極的にイタリア人の子と交流しあうというところまではいかず、継続した交流が必要と感じた。年に何度か交流を続けていた高学年の子どもたちは顔見知りもできており、プレゼントを交換しあったり漢字を教えたりする面も見られた。中学部では、カルネバーレには参加せず英語・体育の授業に参加するという交流学習を行った。イタリア語が分からなくても同じ時間を共有する体験ができた。



### ②マーテルカルメール校との交流（ローマ市内私立小・中学校 スペイン系）

ローマ日本人学校から車で15分に位置する児童・生徒270名の私立の小中学校。毎年、世界の地域のどこかをテーマを決めて学習している。2007年度のテーマがアジアであったために、日本についての学習活動を展開しており、ローマ日本人学校に交流の依頼があった。日本を紹介する交流ということで、運動会で披露した「遊技」と「よさこいソーラン」の発表。「音楽発表」のなかではイタリアの子供たちとともに「大き



な歌」の合唱を行った。イタリア語と日本語は発音が似ており、フレーズを真似して歌ってもらうことで即座に「大きな歌」の歌声が会場に広がった。「独楽回し」「けん玉」「浴衣」「七夕（短冊）」「折り紙（新聞紙でかぶと作り）」「箸」の体験ブースをつくり、日本人学校の子も達が先生役になり、イタリアの子も達にやり方を伝えていく。相手校が、事前に日本について学習しておりイタリアの子も達は非常に興味をもって参加してくれた。教え役の日本人学校の子も達も身振り手振りで伝えていこうという積極性も見られた。

### 3 イタリアの教育制度について

#### (1) 小学校（5年間）

学校によっては国語・歴史・社会を文化系の教師が、算数・理科・地理を一つの理数系の教師が指導するというシステムになっている。基本的に担任は小学校の間、変わることはない。指導内容は文部科学省からのガイドラインがありそれにそって指導されている。しかし、教える順序や使用する教科書は各担任の裁量に任されているところが日本の学校と大きく違う。その他、英語・宗教の時間もある。宗教の時間は選択の自由が認められており、宗教の授業を受けない子どももいる。移民の子や、移民の二世、三世の子も多く受け入れているイタリアの学校の実態がある。特別支援を必要とする子ども、移民の子もなどいろいろな子どもたちを共存させる教育を行っているため、教員の他にアシスタントの職員もいる。イタリアでは、12歳未満の子どもには、常に大人と一緒にいること（外出時だけでなく、自宅内においても）が法律で厳しく定められているため、学校の登下校は保護者による送迎が一般的である。聞き取り調査に行ったイタリアの公立小学校の理数科教員の話によると、保護者の担任に対する期待も大きく、帰り際に子どもを迎えにきている保護者から、多くの希望や苦情を聞かされることもあると言っていた。小学校の卒業試験は数年前まであったが、現在では行われていない。

#### (2) 中学校教育（前期中等教育 3年間）

一般的に一クラスの人数は15名～25名である。日本の中学校と大きく違うところは、高等学校入試のシステムがないことがあげられる。学校によって中学校卒業後の進路についてアドバイスするカウンセラー(教育心理士)がおかれているところもあるが、中学校卒業後の進路選択は個人の希望で定員上問題がなければ、ほぼ全員が希望校に入ることができる。高校入試はないが、各学年の試験そして中学校卒業試験は行われている。どの試験も筆記試験とともに口頭試験が行われるが、知識の多さや正確さはもちろんのこと「いかに積極的に話そうとしているか」という態度が重要視されている。口頭試験については、小学校から訓練されており、プレゼンテーション能力を重要視する国民性は学校教育の中で培われている部分も大きいと思われる。また、学校生活の中でグループによる活動よりも個人の活動が優先される。

#### (3) 高等学校（3年～5年間）

普通高校（文科系 理科系 外国語） 技術高校（商業 農業 航空 観光など）

職業高校（2～3年で商業 農業 工業 ホテルなど） 教員養成学校 芸術高校

基本的には誰もが自分の希望する高校に入学ができる。入学試験はないが、出身中学校の卒業成績は、高等学校を選ぶときの参照にされる。高等学校の2年までが義務教育である。高校に入ってから2年経過した後に自分の進路先を軌道修正することができる。日本の高校教育と大きく違う点はイタリア全国共通試験（マトゥリタ）の存在がある。全国共通試験（マトゥリタ）の結果によって大学の入学資格も与えられるため、高校の最終学年はその試験の対策も行われるという。試験は数日間にわたって行われ、



専門書持ち込み可で論文を書く試験,そして口頭試験なども行われる。口頭試験では,広い範囲からテーマが与えられ,それについて自分の意見を述べる方式である。試験官によって内容が違うなど全国共通の試験といってもかなり印象の違うものである。

#### (4) 大学

国立大学の割合が高く,医学部,歯学部,獣医学部,建築学部など一部の学部をのぞいて入学試験はなく,前述の全国共通試験に合格するとどこにでも入学できる。従って在籍数はかなりいるが講義に出席し,試験を受ける実際の学生の数とは大幅に食い違っているといわれる。

#### 考察

小学校からすでに口頭試験というものを行っていることが大きく日本の教育と違うと感じた。知識を暗記するだけではなく,自分の言葉で語れなければ評価されない社会の違いを感じた。イタリアではいつも重要視されるのが「自己主張をする能力,自己を表現する能力」つまり「口頭で自分の意見を述べ,討論ができる能力」だといわれる。イタリアでは「長い話ができない人は能力がない。」と見なされるという。また,一つの例であるがイタリアにある日本企業に勤める方に話を聞く機会があったが,いっしょに働いているイタリア人の職員は日本人に比べて非常にプレゼンテーション能力が高いという。社会がどのような能力を要求しているのかを学校教育は顕著に表していることと,イタリアと日本との価値観の違いを感じた。

## 4 現地生活

一日の大半が日本人学校での仕事のため,イタリアの現地社会と接する機会は非常に少ない環境であった。しかし,通勤の途中,休みの日には日本とは違う生活や文化を垣間見ることができた。

#### 街並み

世界で最も有名な観光都市であり,条例により古い建物が保護されているので,遺跡が現代の生活の中に共存している感じであった。また,美観を損ねるために大きなネオンは街中には見られず,街灯もオレンジ色に統一されている。夜のローマは,オレンジ色の光の中に,古い建物が浮かび上がり本当に美しいと感じた。しかし,日中見ると街じゅう落書きだらけ,ゴミも非常に多い。車が狭い道路に自由に路上駐車している。逆駐車も二重駐車もなんでもあり。しかし身障者用の駐車スペース(オレンジの線)は必ずあけてある。城壁の外は,少し車を走らせると農業地帯がひろがっており北海道のように感じた。



#### 交通

バイクの数が非常に多い。駐車スペースの少ないローマではバイクは有効な通勤の手段である。ネクタイを締めた会社員も,子どもを小学校につれていく母親もバイクに乗っている人がたくさんいた。バイクは日本製のバイクが多かった。バイクも車もバスも猛スピードで運転していく。もたもた運転していると後ろからクラクションの嵐であった。バス停にはバスの時刻表はない。バス路線の停留場名が書かれてあるだけである。いつ来るかわからないバスを来るまで待つ。しばらく乗りたい番号のバスが来ないときもあれば,2台続いてくることあった。バスや地下鉄は頻繁にストライキをやっている。赴任して

最初に覚えたイタリア語は「ショーペロ（ストライキ）」である。

## 店

法律で24時間営業の店は禁じられているらしい。そのためコンビニエンスストアはない。それに代わるものではないが「タバッキ（たばこ屋）」「バール（コーヒーショップのようなもの）」「アリメンターリ（食品などをうっている雑貨屋のような店）」などがある。タバッキやバールはバスのチケットや切手、そしてトトカルチョを売っているところもあった。交流学习で訪れた私立の学校にもバールがあった。10時ころのメレンダ（おやつ）の時間に、こどもたちがパンやお菓子をそこで買って、おやつを食べながら校庭で遊んでいた。アリメンターリはスーパーのように買いたい物を籠に入れていくシステムではなくて、「何を何個ちょうだい。」「他には」「何々を何グラム」というように、お客さんの顔をみて一体一で会話しながら買い物をしていく昔ながらのお店である。「タバッキ」も「バール」も「アリメンターリ」も一種のコミュニティのようになっているように感じた。



## 人々

あいさつを大切にし、生活を楽しむ

イタリアの人々は子どもも、お年寄りも若者もよく挨拶する。顔をみて、目があったら「チャオ」少しでも顔見知りになったら「チャオ」、広場で同じベンチに座っただけのおばあちゃんにも別れ際には「チャオ」と町中が挨拶にあふれている。機械的なあいさつではなく、目をみてニコッと笑って「チャオ」というのが、粹に感じた。またおしゃべり好きな人が多く、広場やバス停やバールで大きな声でおしゃべりしている姿をよく見かけた。子ども、お年寄りに誰もが親切である。バスや、地下鉄に乗っていると若者が自然にお年寄りや子どもに席を譲る場面を何度もみた。

7月、8月のバカンスの時期になると、観光地をのぞくローマの中は社会の機能が止まってしまうようである。近所の人々はみなバカンスでローマを離れてしまう。近所のバールも、メルカートも肉屋もこの時期には閉まってしまう。働くときにはしっかり働き、休みにはのんびり何もしないというのがこの国のバカンスの過ごし方のようなのである。小さなことはこだわらない、豊かさ、おおらかさを感じる事が何度もあった。

## 5 終わりに

3年間の派遣期間は、多くのことが体験できた期間であった。海外でたくましく学ぶ子どもたちの笑顔にかこまれ、多くのパワーをもらいながら教育活動に従事することができた。仕事の上でも、生活の上でもお互いに助け合っていかなければ生きていけない海外生活。周りの方々に支えてもらいながら無事に派遣機関を終了できたことを感謝し、3年間の経験を現在の教育活動に生かしていきたい。

